様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ６ 月 １３ 日現在

機関番号：１６３０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2011～2015
課題番号：２３５３０２４０

研究課題名（和文）近代日本における相互扶助の経済思想とその実践に関する研究

研究課題名（英文）A Study on economic thoughts and practices of the mutual aid in modern Japan

研究代表者
松野尾　裕（Matsunoo, Hiroshi）

愛媛大学・教育学部・教授

研究者番号：３０２３９０５８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,400,000円

研究成果の概要（和文）：日本の大正期から昭和前期に誕生し、成長した協同組合運動と農村共同体運動に焦点を定め、近代日本における相互扶助の思想と実践について実証的研究を行った。研究対象は、日本における協同組合運動推進者である賀川豊彦が日本各地に設立した農民教育のための共同体である「農民福音学校」と、北海道で酪農組合の創設に尽力した黒澤酉蔵による農民育成組織である「酪農義塾」とについて、一次資料を用いて詳細に研究した。また、賀川豊彦や黒澤酉蔵が受容したデンマークの農業思想と、その農業思想の担い手を育てるフォルケ・ホイ・スコーレ（国民高等学校）の教育運動について考察した。

研究成果の概要（英文）：Focusing on the born and growth the cooperative movement and rural community movement in Japan of the Showa period from the Taisho period,I studied the idea and the practice of mutual aid in modern Japan. Kurosawa Torizo who founded the dairy cooperative in Hokkaido, and Kagawa Toyohiko who founded farmers gospel schools, were detailed analyzed. It was also analyzed the ideas of Danish folk high school that gave the ideological influence on japanese cooperative movement and rural community movements.

研究分野：経済思想史

キーワード：相互扶助

１．研究開始当初の背景

（1）社会的企業（social business）が世界的に注目されている。それは、相互扶助（利益共有）を基礎に据えた経済活動によって、貧困などの社会問題を解決しようとする新しい経済の構想である。

（2）2009 年は、賀川豊彦の救貧・防貧（＝社会改良）運動開始から 100 年に当たり、それを記念する事業が協同組合関係団体及び学会を中心に企画・開催され、それらのひとつとして、社会的企業の提唱者で 2006 年のノーベル平和賞受賞者であるムハマド・ユヌス（Muhammad Yunus）氏の来日もあった。

２．研究の目的

（1）本研究の目的は、大正期から昭和前期に協同組合運動あるいは農村共同体運動による人間形成と経済活動（教育と実業）を追求した賀川豊彦（1888－1960）と黒澤酉蔵（1885－1982）の、それぞれの事業に関する考察を通して、日本における相互扶助の経済思想とその実践を掘り起し、それらを 21 世紀の共生社会にふさわしい経済思想史の一齣として描き出すことである。

（2）本研究の学術的な特色・独創的な点は、近年の厚生経済学の分野で重視されている、A．セン（Amartya Sen）が提唱したケイパビリティ（capability、人が選択し得る生き方の幅、すなわち人生の自由度）やエージェンシー（agency、人は時には自分を犠牲にしてでもある人の願いの実現を自分の使命として引き受けること）の概念と共通する内容を持つ思想とその実践を、日本社会の民間層から掘り起こすことによって、日本社会の土壌から＜経済と倫理＞の問題解決の糸口を導き出すところにある。

３．研究の方法

（1）本研究では、キリスト教を共通の根として誕生した協同組合運動ないし農村共同体運動の 2 つの流れに着目した。第一は、賀川豊彦とその協力者により主導された運動の系譜として農民福音学校の活動について考察した。第二は、田中正造の弟子である黒澤酉蔵とその仲間たちが北海道で創設した酪農組合と、その担い手を養成するための施設である酪農義塾の活動について考察した。

（2）研究期間の前半では上記 2 つの系譜に関係する一次資料の蒐集及びフィールド調査を行った。後半では蒐集した資料の内容を分析・検討することにより、それらの事例に見出される教育＝実業事業の在り方を多面的に把握し、近代日本における相互扶助の経済思想とその実践の特質（可能性と限界）を解明することに努めた。

４．研究成果

（1）賀川豊彦の自伝的小説『乳と蜜の流るゝ郷』（1935 年）の記述に見出される農村と都市との連繋という発想を導入に用いて、黒澤酉蔵と賀川豊彦という、それぞれにキリスト教信仰に基づいて協同組合（戦前は産業組合と呼ばれた）運動を推進した二人の人物の思想的繋がりを析出した。

1920～30 年代の両大戦間期は、社会全般に都会的生活への憧れが膨らんだ一方で、恐慌下に深刻化した農業・農村問題への対応を模索する新たな社会運動が台頭した時期である。千石興太郎（1874－1950）は産業組合中央会に拠って産業組合の強化に努め、山崎延吉（1873－1954）は新しい形の農民教育－日本国民高等学校－に力を注いだ。これらは民間の主張・運動だが、政府が推進した自作農創設策や農山漁村経済更正運動と連動する形で取り組まれた。また杉山元治郎（1885－1964）は日本農民組合に拠って農地の共有化を説いた。都市部では、羽仁もと子（1873－1957）による婦人教育を通じた生活改善の主張が全国へ支持者を広げ、また消費組合運動は労働組合へ争議支援などを通じて接近し、急進化し始めていた。黒澤や賀川の主張は、こうした大きな状況の中で説かれたもので、デンマークの自作小農維持策や長野県その他の農家副業振興策などを巧みに取り入れて作られた。

日本の協同組合運動史の中で黒澤と賀川は強力な発言力と行動力によって産業組合を創設し、かつ事業を発展させることに成功した人物として、従来別個に論じられてきた。官民協調で取り組まれた産業組合運動は多くの場合宗教と関わりのないところで展開したが、黒澤と賀川にはそれは当てはまらない。信仰が彼らを激しく動かしたのであり、その行動の影響力もまた大きかった。キリスト者として社会事業に関わったものは幾人もいるが、とりわけ協同組合に熱中したのはこの二人である。黒澤と賀川を協同組合運動に突き動かした思想の核として、二人に通底する独特のキリスト教観があったことが見出された。

すなわち、黒澤が設立した酪農義塾が戦後酪農学園として再建された時、賀川は「酪農讃歌」と題する歌をつくったが、その歌詞に「乳房持つ神」という言葉が入っている。このことを探究の手がかりにして、賀川には神に母性を見る特異な神観があること、また賀川の主張に表れる「生命の成長」「自由意志」という言葉で表現されるキリスト教理解に基づく思想は、黒澤の主張に表れる「希望は生命である」「希望は成長する」という言葉で表現される思想と共通していること、そしてこれらの特徴的な思想が彼らの教育と実業の実践を貫いていることを解明した。

（2）賀川豊彦と黒澤酉蔵の思想の源泉には、デンマークの農業とその農業の担い手である農民のエートスへの共感もまた見出される。内村鑑三の講演録「デンマルク国の話」

（1911 年）は、北欧の一小国が実現した国民の精神性の高さと自作農業を基盤とした国富増大を日本に知らせることに貢献した。内村は 1924 年にも「西洋の模範国 デンマルクに就て」という一文を発表し、これらによりこの頃日本でデンマークを理想の農業国、とりわけ酪農国とみる風潮が生じた。デンマークにおける農業の発展、さらには協同組合や社会福祉、環境保全などの運動にこの自作小農の力が大いに関わっている。これらの農民の精神的支柱となったのがニコライ・フレデリク・セヴェリン・グルントヴィ（Nikolaj Frederik Severin Grundtvig,1783-1872）であった。グルントヴィが提唱した民間教育組織フォルケホイスコーレ（Folke hoj skole）は、国家の教育行政の支配を受けず、公的な教育制度の外にあるいわばフリースクールである。そのことが農民の自治意識や草の根民主主義を育てることに重要な役割を果たし、デンマークの国民教育にとって重要な位置を占めるものとなった。

グルントヴィに引きつけられた人物に宇都宮仙太郎（1866－1940）と出納陽一（1890－1976)がいた。宇都宮と出納は北海道に酪農業を確立させるのに尽力すると共に、日本における本格的なバター製造を始めたことで知られている。宇都宮はアメリカで酪農業を学んだ際にデンマークの酪農経営の優秀さを教えられた。それ以来、宇都宮はデンマークの酪農に強い関心を抱き続けた。彼自身はデンマークを訪れる機会を持たなかったが、彼の娘婿である出納陽一が酪農に本格的に従事するにあたり、出納にデンマークの酪農を実地に学ぶ機会を与えたのである。出納はデンマークに 2 年余り滞在し、農家に寄宿して酪農経営の実習に励むと共に、農閑期にフォルケホイスコーレに入学し農民精神を学んだ。

大農・粗放農業を旨として始まった北海道開拓のなかで、なぜ大正期から昭和前期に強靱な協同組合主義に基づく自作小農による酪農業が確立したのか。そこには協同組合運動を推進した一群の人々の行動のなかに、特に宇都宮仙太郎と出納陽一を中心にしてグルントヴィの思想の受容とその実践があったことを解明した。そして、教育思想と経済思想の両視点からグルントヴィとフォルケホイスコーレへの理解を深めることは、21 世紀の人間社会にふさわしい経済のあり方を構想するうえで大きな意味を持つと結論づけた。

（3）賀川豊彦は牧師であるとともに社会事業家として活躍し、大正から昭和前期に精力的に取り組まれた彼の活動は労働学校、農民組合、福祉・医療事業など多領域にわたったが、いずれにおいても賀川は一貫して相互扶助による社会改良を主張し、実践へ導いた。農民教育においては、土を愛し・人を愛し・神を愛すという「三愛」の実践を説いた。

農民福音学校は、日本の農村の再生を願った賀川が、「農村更正と精神更正」の理念のもとに構想した、私塾的な農民教育の事業であり、1927 年 2 月に兵庫県武庫郡瓦木村（現・西宮市）の賀川の自宅において、杉山元治郎の協力を得て 1 ヶ月間開催したのが始まりである。その後 1930 年から始まった恐慌により農村が窮乏の度を深める中で、農民福音学校運動が全国的な広がりを見せるようになった。30 年 8 月に静岡県駿東郡高根村（現・御殿場市）に御殿場農民福音学校高根学園が、32 年 5 月には東京府豊多摩郡千歳村（現・東京都世田谷区）に武蔵野農民福音学校が開設された。これらの農民福音学校には生徒用の寄宿施設が設けられ、地元の農業青年はもとより全国から有志が参加した。これら常設の学校の他に、数週から 1 ヶ月程度の期間で全国各地の小学校などを会場にして、農民福音学校の名で農村の生活改善・農業改良のための講習会が数多く開催された。

御殿場農民福音学校高根学園では、賀川が唱えた「立体農業」（すなわち、米作にたよらず、蔬菜栽培、栗・胡桃（くるみ）などの木の実栽培、椎茸栽培、養蜂、豚・山羊の飼育などを組み合わせた多角的農業経営）の実践に加え、1934 年に御殿場養豚加工組合を設立して、当時農村では最も困難とみられた食肉加工品（ハム・ベーコン・ソーセージ等）の製造を試みた。その後、高根学園で学び御殿場養豚加工組合の技術者となっていた勝俣喜六が、1937 年に設立された群馬畜肉加工組合の生産技術指導者となり、我が国初の農民資本による食肉加工事業を成功させたのである。

以上の通り、当時の産業組合がもっぱら米穀に関心を向けていたなかで、賀川豊彦らが挑戦した農業経営変革へ向けての「農村更生と精神更生」の構想を、御殿場農民福音学校高根学園の事例を用いて詳細に解明した。

（4）賀川豊彦が構想・実践した農民福音学校と、黒澤酉蔵が構想・実践した酪農義塾とは、別個に構想されたものであるが、協同経済の実現を担う人間の育成と事業の具体化を目指したという点において、思想的に通底するものを見出すことができた。両者が構想・実践した教育と実業は、日本における相互扶助の思想の現代史的意義を考えるうえで有益である。

賀川が自ら構想した経済社会像を描いた最初の著作は『主観経済の原理』(1920 年)である。その中で賀川は、「私は、此際経済学の根本的改造を叫ぶものである。それは『人間に帰れ』と云ふ叫びである」と述べた。この著作は賀川の経済学批判の書であると言える。実証主義に大きく傾いた経済学は、近年、A.センが経済学に well-being(良く生きること)とは何かといった規範的議論を導入し、経済学の枠組みの革新に大きく貢献したのを機に、経済哲学が経済学の注目すべき一領域として再興しようとしているが、賀川

の『主観経済の原理』も、そうした経済学の進化の文脈に位置づけて考察することが可能である。ここで賀川がいう「主観」という言葉の使い方は独特である。賀川によれば、「主観」は、人間の成長による「自由意志」よって宗教的、道徳的、芸術的に目覚め、倫理性を帯びるものと考えられている。賀川の説く「主観経済」は「規範経済」と言い換えられてよい。ただし、「規範」はあくまでも人間の成長による「自由意志」に基づくものでなければならない。

黒澤が酪農義塾における教育のために定めた「農民道五則」というものがある。その全文はかなり長いものであるが、次のように要約できる。第 1「農民は誠其ものたれ―農民は正直であれ」、第 2「農民は天地の経綸に従え―農民は其の土地の役目を知れ」、第 3「農民は土を愛せよ―農民は土地を肥やせ」、第 4「農民は勤労を尊び倹約を守れ―農民は無駄をせず、うんと働け」、第 5「農民は協力一致せよ―農民は産業組合に依つて団結せよ」。このうちの第 3 則から導き出されたのが黒澤の「循環農法の原理」である。すなわち、土地→作物→飼料→家畜→堆肥そして再び土地へと循環する農業である。黒澤は酪農指導のあらゆる場面においてこの「循環農法の原理」を説いた。今日の持続可能農業の先駆をなす考え方だといえる。そして、第 5 則には、農民を救うのは農民自身であるとする黒澤の思想が表明されている。黒澤は若き日の師である田中正造の土と農民を守る決心と、北海道で出会ったもう一人の師である宇都宮仙太郎の酪農経営とを結び合わせることにより、自身の「農民道」を築いたといえる。

戦後 1945 年 10 月に協同組合運動再建懇談会が開かれ、日本協同組合同盟が結成されて、会長に賀川豊彦が就いた。そして、黒澤らにより日本協同党（45 年 12 月～46 年 5 月）、協同民主党（46 年 5 月～47 年 3 月）、国民協同党（47 年 3 月～50 年 4 月）といった協同組合主義を標榜した政党が相次いで結成された（括弧内は成立・解散年月）。それらは短命であったとはいえ、そこに掲げられた理念は決して過去のものとはなっていない。国民協同党の立党声明には、「祖国日本を再興し真に民主化された平和な文化国家を建設するには、人類愛を基調とするヒューマニズムに立つ新国民主義運動を展開しつつ徒なる階級闘争を止揚し勤労、自主、相愛の精神に徹する協同主義社会を実現するの外道はない。すなわち我等は階級並びに民族の至上主義を排撃して基本的人権を尊重する全国民の生活協同体制を確立し道義的世界平和の推進に寄与せんとする」と謳われている。

ポスト冷戦期の現代において、上記の立党声明の文言は改めて新鮮な響きを放っているといえないだろうか。テツオ・ナジタは『相互扶助の経済』（2015、邦訳）で、江戸期の無尽講や報徳から戦後の協同組合主義政党までを通覧し、無軌道に膨張する市場経済の中で民衆は相互扶助の知恵を働かせて生活を守ってきたことを論じている。相互扶助は、ナジタの言葉の通り「理想主義的な倫理の力」であるが、それは最も現実的な実践倫理なのだといえる。これが本研究の結論である。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 3 件）

①松野尾裕、賀川豊彦と黒澤酉蔵―相互扶助の思想にもとづく教育と実業―、賀川豊彦論叢、査読有、24 号、2016（未刊）、頁未定

②松野尾裕、御殿場農民福音学校と食肉加工品製造の実践、愛媛経済論集、査読無、34 巻 2 号、2014、9－23
http://iyokan.lib.ehime-u.ac.jp/dspace/bitstream/iyokan/4502/1/AN00024061_2014_34_2-9.pdf

③松野尾裕、二人の協同組合主義者 黒澤酉蔵と賀川豊彦―『乳と蜜の流るゝ郷』によせて―、日本経済思想史研究、査読有、13 号、2013、39－58

〔学会発表〕（計 4 件）

①松野尾裕、グルントヴィと北海道酪聯の開拓者たち―宇都宮仙太郎と出納陽一を中心にして―、2015 年度葉山町民大学、2016 年 3 月 7 日、葉山町教育委員会（神奈川県三浦郡葉山町）

②松野尾裕、賀川豊彦と黒澤酉蔵―相互扶助の思想にもとづく教育と実業―、賀川豊彦学会第 28 回大会、2015 年 7 月 31 日、明治学院大学（東京都港区）

③松野尾裕、御殿場農民福音学校と食肉加工品製造の実践、日本経済思想史学会 2015 年度第 1 回西日本例会、2015 年 4 月 11 日、同志社大学（京都府京都市）

④松野尾裕、二人の協同組合主義者 黒澤酉蔵と賀川豊彦、日本経済思想史学会 2012 年度第 1 回例会、2012 年 7 月 14 日、慶應義塾大学（東京都港区）

〔図書〕（計 1 件）

①松野尾裕、矢嶋道文、他、クロスカルチャー出版、互恵と国際交流、2014、409（163－191）

６．研究組織

(1)研究代表者

松野尾　裕（ MATSUNOO　Hiroshi ）
愛媛大学・教育学部・教授
研究者番号：30239058